

泣いて、笑ってニ ナース人生

潜在看護師が地域医療を変える! (前編)

全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス代表 菅原 由美

ナースになるなんて!

私は10歳まで生きられないと言われたほど身体が弱く、小中高と病院通いの日々でした。病院との縁が深かったことで医療に関心をもち、保健委員をやったり、小学校の卒業アルバムにはお医者さんになりたいと書きました。もちろん中学高校になれば、自分の学力では医者になれないと分かります。典型のお嬢さん学校に通っていたので、親も学校も、良い会社に勤めて早くお嫁に行くのが普通という考え方を持っていました。

私は理系クラスでしたが、理系を選んだ生徒は120名のうち10名だけ。先生からは薬学部に行くように言われました。それしか選択肢がないのです。でも試験管を振るような理科の実験が好きなのではないし、部屋に閉じこもってする仕事も好きじゃない。どう考えても薬剤師には向いていない。元々結婚願望が強かった私は、薬剤師よりも看護師のほうが子育てや家庭生活に役立つはずだと思い始めていました。そして高校3年の夏休みに進路変更し、看護の道に進みたいと先生や両親に言ったのです。あの時代、ナースの仕事は低く思われており、また身体も弱かったので、当然のように「ナースになるなんて!」と反対されました。それでも、友達から東海大学医療技術短期大学が新設されたことを聞き、大学でキャンパスライフを味わいたい、青春を謳歌したいと思った私は、推薦試験を受け合格。暗れて憧れの大学生、看護学生となったのです。

看護は技術ではなく考えること

やりたいことができるようになったせいでしょうか。私はすっかり健康になりました。大学というのは単位の取り方は自由にできると思っていたのに、選択科目は土曜日の2限だけ、月曜から金曜までび

っしり全部必修科目なのです。「えっ、うそっ、朝から晩まで授業なんて、高校と同じ生活をまた続けるの?」と夢が崩れ去りました。ところが、学則を読むと出席は2/3以上と書いてある。1/3休んでも卒業できるんだと計画的に休み続けました。先生方も教授会で何度も私のことを審議したそうです。でも学則を違反していないから留年させるわけにはいかない。「あなたを担当して教師ってなんて情けない職業だと思い知らされた」と言われました。そんな悪い学生として3年間を過ごしたのです。

新設校で1回生だった私達は、学生会でも何でも最初から立ち上げなくてはなりません。みんなで集って話し合ってもなかなか意見がまとまらない。私はぐだぐだするのは嫌いなので先に帰ってしまいました。そして、いない間に副会長に選出され、3年間みんなをまとめるリーダー役を務めることになったのです。それが因らずも今の仕事を始める土台となっているのかもしれませんが。私は不真面目な学生でしたが、看護は好きでした。実習時間が終わっても医師や師長のOKをもらってお産の見学をするなど、貴重な体験学習をしました。また、実習で日にするがん末期の患者さんが、苦しんで痛がって、そ



